

令和6年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書／事後評価書

団体名	一般社団法人江原河畔劇場	
施設名	江原河畔劇場	
内定額	4,370	(千円)

1. 基礎データ

(1) 開館日数・事業本数・貸館日数

項 目		令和5年度	令和6年度
開館日数		344	341
年間事業本数（※1）	主催事業	9	11
	公演事業	5	5
	（内、本助成対象事業本数）	0	0
	人材養成事業	0	3
	（内、本助成対象事業本数）	0	1
	普及啓発事業	4	3
	（内、本助成対象事業本数）	0	2
貸館日数	その他 内容： 記入してください	0	0
	ホールごとの貸館日数	69	32
	ホール名： 劇場 座席数： 140	38	13
	ホール名： スタジオ 座席数： 60	29	17
	ホール名： ロビー 座席数： 20	2	2
	ホール名： 記入してください 座席数： 記入してください		
	ホール名： 記入してください 座席数： 記入してください		

※1 事業の延べ実施回数ではなく、事業本数を記入してください。

(2) 施設利用者数・利用率

項 目		令和5年度	令和6年度
施設利用者数（※2）	主催事業入場者・参加者数	2,762	3,781
	公演事業	1,845	2,101
	人材養成事業	0	711
	普及啓発事業	917	969
	その他 内容：	0	0
	貸館事業入場者・参加者数	2,912	2,174
	その他 内容： 共催・提携公演、クリエイション、インターン、大学臨地実習、職場体験受け入れ	1,334	1,564
計		7,008	7,519
施設の利用率(%)		56.7%	52.8%

※2 実演芸術の公演等を鑑賞する者、ワークショップ等に参加する者、その他の劇場・音楽堂等の事業を利用する者の延べ人数を記入してください。劇場・音楽堂等のスタッフや、併設施設(美術館、図書館等)のみへの入場者数は除きます。

(3) 公演事業データ

事業種別		事業本数	公演回数	入場者・参加者数	入場者・参加者率	事業本数内訳						
						演劇	音楽	舞踊	伝統芸能	演芸	総合(※4)	その他
令和5年度	主催公演(※1)	5	13	998	77.5%	4		1				
	共催・提携公演(※2)	2	11	687	98.1%	2						
	貸館公演(※3)	5	15	927	69.0%	4			1			
	計	12	39	2,612								
令和6年度	主催公演(※1)	5	20	1,443	71.7%	5						
	共催・提携公演(※2)	1	9	564	89.5%	1						
	貸館公演(※3)	6	13	1,239	89.1%	4	1					1
	計	12	42	3,246								

※1 名義主催は除きます。

※2 名義共催を含みます。

※3 「貸館公演」における「入場者・参加者数」及び「入場者・参加者率」は概算で構いません。

※4 「総合」には、フェスティバル等における事業数を記入してください。

2. 公演事業の実績記録と自己評価

(1) 各公演事業における評価項目「創造性・企画性」に関する評価指標・目標(値)

- ・ 令和6年度助成対象事業のうち公演事業について、助成対象事業ごとに自己評価を記入してください。

事業番号	事業名	入場者数		入場率	評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	備考
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								
		目標値								
		実績値								

3. 自己評価

評価項目①:創造性・企画性

評価の観点
・(企画力)地域の状況と芸術性とのバランスが取れた、特色ある事業計画である。 ・(制作力)優れたアーティストやスタッフ等が才能や技能を発揮し、高い水準の作品制作や各種事業が行われている。 ・(発信力・影響力)圏域内外の実演芸術を牽引する成果が期待できる。 ・(レジデントカンパニー・アーティスト)当該劇場を創造拠点又は準拠点とする実演芸術団体やアーティストを擁する。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- ・ 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら、事業類型ごとに自己評価を記入してください。

	評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
公演事業						
人材養成事業	・人材育成事業への応募者数 ・育成対象者の研修後の満足度、反応 ・指導者による評価	・募集定員の80%、市外からの応募10%程度目標 ・アンケートで好評価を得る。「満足」以上の回答80%以上 ・インタビュー、ヒアリングで概ね好評価を得る	・受講者数40名。 応募者数44名。定員30名に対して147%の応募。 市外からの応募9名。また京都・鳥取・佐賀といった県外からの受講者も複数名含まれた。 ・受講者アンケート22件すべてが「大変満足」または「満足」と回答し、満足度100%。 ・講師からは「講義の構成が多様で、それぞれの専門性が活かされていた」「多様な受講生で、刺激的な場だった」など、プログラム全体の構成や参加者の幅広さに対する好意的なコメントが寄せられた。	演劇的手法を活用したワークショップへの社会的関心と需要の高まりを背景に、江原河畔劇場では、学校や地域における現場実践を担う人材を育成する「ワークショップファシリテーター養成講座」を実施した。地域課題や教育現場のニーズに即したテーマ設定や講座構成は、劇場ならではの企画力を活かしたものであり、実践性・発展性のある講座となった。 前期・後期あわせて全19回の講座には、全国で活躍する講師陣を招き、講義・実践・創作・フィードバックを段階的に構成。最終的には、受講者がチームでオリジナルワークショップを企画・発表するまでの流れを実現した。プログラム全体が、初心者にも分かりやすく段階的に学べる構造となっており、制作体制としても高水準であったと評価できる。 2025年3月8・9日に開催した成果発表会(ワークショップ見本市)では、受講者によるオリジナルワークショップ全6本を一般参加者向けに実施。10代～70代までの幅広い参加者が訪れ、参加者アンケートでは満足度98%(大変満足・満足)という高い評価を得た。参加者の居住地も豊岡市内をはじめ、但馬地域全域にわたっており、また京都・大阪など県外からの来場者もあり、地域を超えた広がりが見られた。 江原河畔劇場のレジデントカンパニーである青年団の俳優・スタッフ、そして芸術文化観光専門職大学の学生や教員が受講者として参加したことで、年齢や立場の異なる人たちが一緒に学ぶ実践的な場となった。	◇江原河畔劇場の設置者である有限会社アゴラ企画／劇団青年団は、こまばアゴラ劇場を拠点に2003年に「オリジナルのワークショップを創る研究会」を開催して以降、アーティストが独自にプログラムを考案し、全国規模で演劇ワークショップを展開してきた。その実績や得られた知見を基に、豊岡でファシリテーターの養成に取り組み、単発ではなく連続講座としている点は意義深い。定員30名を超えて44名の応募が広域からあった点にもニーズの高さが伺えるが、公演等調査では前期の座学に比して後期の講座(実習・実践)で参加者数が減少したことが指摘されている。座学と実習・実践では参加者数に差が出るのは予想され得ることであり、今後は計画段階から別々の目標数を設定すべきではないか。 ◇実践において、関係性のある児童劇団の協力を得ることは有効であると思うが、実践水準において懸念が残る。子どもであるという点で慎重さを求めたい。 ◇カリキュラムと参加者層が合致するよう、制度設計に更なる工夫を求めたい。また今後は、オリジナルのファシリテーション方法の開発を打ち出すだけでなく、汎用性のある既存メソッド(各種シアターゲーム、即興演劇やフォーラムシアターの手法等)の導入や、ワークショップに参加する対象者の属性や特徴、個性を踏まえた対応力、応用力を高めるプログラム、また子どもの発達段階に応じた、認知心理学などを踏まえたメソッドが開発されることにも期待したい。	
普及啓発事業	・全事業の応募者数と参加者数 ・参加者の満足度、反応 ・関係者(保護者など)による評価 ・新規来館者数 ・新規参加者数	・2事業中2事業で目標参加者数を達成。実参加者数160人 ・アンケートで好評価を得る。「満足」以上の回答80%以上 ・アンケートで好評価を得る。「また実施してもらいたい」や「満足」以上の回答80%以上 ・普及啓発事業の発表会で初来館者数30%増加 ・来年度までに新規参加者数30%増加	実参加者数計64名。 ・アンケート回答数95件。「満足」以上の回答数93件。 満足度の割合97.9% ・「また参加したい」「参加させたい」という回答が95件中91件。95.8%。 ・初来館者は全体で134人となり、昨年度比で約38%の増加となった。 ・児童劇団小学生の初参加者10名(18名中)、中高生の初参加者7名(25名中)、ひょっこりシアター初参加者7名(21名中)。児童劇団においては昨年度の新規参加者数(12名)から今年度17名と約41.6%増加した。	地域の課題に向き合いながら、年齢・障害・文化的背景の異なる参加者が創造的に関われる機会を設けた。児童劇団やひょっこりシアターなど、それぞれの特性に応じたアプローチがなされ、芸術性と地域性の両立が実現された。 しかし、ひょっこりシアターにおいては、実参加者数が21名にとどまり、想定していた拡充にはつながらなかった。 『転校生』をはじめとする発表公演やワークショップでは、専門的な演出・技術スタッフ、俳優が携わり、実践的かつ高水準な作品づくり・プログラム運営が行われた。 初来館者数の増加やアンケート回答の充実からも見られるように、地域外からの関心や参加も増えつつあり、豊岡市外への波及力も強まりつつある。特に、ひょっこりシアターの発表会は、障害のある方やその家族を対象とした事業として継続を求める声も多く、地域に定着している。 江原河畔劇場のレジデントカンパニーである青年団の俳優や演出家、照明家が講師やスタッフとして参画。また、芸術文化観光専門職大学の学生も公演制作にインターンとして参加しており、創造拠点としての機能が強化された。 事業全体を通して、地域で暮らす人々が「自分たちの表現」を見つけ、実践できる仕組みづくりが進んだ。今後の継続とさらなる展開に向けて、基盤形成ができた一年であった。	◇「ひょっこりシアター」の参加者数の伸び悩みは、意見交換の際に聞いた通り、個人参加の場合は移動の問題が大きいと思われる。アクセスの課題については、広報面含め専門機関に相談されたい。また、障害のある人々の表現の場が維持されることが重要と思われるので、少人数であっても体験の質が向上するよう、引き続き尽力されたい。 ◇「たじま児童劇団」については、公演等調査からも活動の質の高さが確認できた。国際的に活躍する演出家から子ども達が直接指導を受ける機会は希少であり、継続することで日本を代表する児童劇団に成長していくことを期待する。 ◇児童劇団、ひょっこりシアター共に一定程度の新規参加者を得ている。今後も参加者が固定することなく、演劇を体験する機会が地域の人々に開かれるよう、受け入れ体制を整え事業を継続されたい。	

(2) 「創造性・企画性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

江原河畔劇場ワークショップファシリテーター養成講座 本事業では、さまざまな講師を招いて養成講座を実施した。これにより、演劇だけに限らず、ダンスや美術など各方面のアーティストからファシリテーションの実践を学ぶ機会を提供することができた。この講座の成果発表として、受講者がオリジナルワークショップを考え実践する「見本市」を開催した。「見本市」には、純粹にワークショップに参加したい一般の方々だけでなく、養成講座に参加できなかったものの、実践を学びたい、または自身でプログラムをファシリテーションしたいと考える学校教員や地域の子どもたちに遊びの場を提供している方なども参加した。これにより、教育現場での演劇的手法の活用が広がり、創造性・企画性を持った人材の育成に寄与した。 これらの事例は、参加者が主体的に関わり、創造的なプロセスを重視することで、創造性・企画性の向上に寄与したことを示している。
たじま児童劇団 たじま児童劇団は、小学生の部と中高生の部に分かれ、演劇ワークショップや創作活動を行っている。小学生の部では、江原河畔劇場の特性を活かし、劇場全体を使った創造的な活動を数多く実施した。例えば、劇場内でのかくれんぼや、ロビー、楽屋、廊下などの空間を利用して短い演劇を創作・発表するプログラムを行った。これらの活動を通じて、子どもたちは自由な発想で物語を考え、協力して作品を作り上げる力を養った。最終日には、子どもたちが自ら創作した作品を観客の前で発表し、創造のプロセスを共有する場を設けた。 第4期発表会では、『闇バイト』やそれを取り締まる『光バイト』、江戸時代から令和にタイムスリップした少女たちの『女子会』、悩み相談を受けるトイレの『花子さん』など、子どもたち自身の視点で現代を映し出す作品を披露した。 中高生の部では、演劇の基礎やチームワークを形成するワークショップを実施し、参加者は表現力や協働性を高めた。その後、プロの演出家と作品をつくることを前提に、集中稽古に臨んだ。集中稽古では、プロの俳優が演出助手としてサポートし、参加者はプロのスタッフに囲まれながら、小道具の管理や舞台転換、音響のきっかけなどを自分たちで確認・共有しながら進めた。最終的には、プロの現場と同様の緊張感の中で本番を迎え、演劇の「つくる」「伝える」プロセスを総合的に経験する機会となった。また、2023年度に上演した『転校生』は、豊岡演劇祭2024のオープニングプログラムとして再演され、新聞各社に取り上げられた。
ひょっこりシアター 江原河畔劇場で実施されている「ひょっこりシアター」では、参加者が自身の生活スタイルやベースに合わせて参加できるよう、演劇体験ワークショップと演劇創作ワークショップの2種類のプログラムを提供した。これにより、例えば会社勤めにまだ慣れていない特別支援学校の卒業生が、自分の体調の様子を見ながら参加するなど、参加者のニーズに合わせて演劇を体験できる企画となった。 障害のある参加者が「やりたいこと」や「やりたい役」を自由に出し合い、各グループで物語を考え、小作品として形にした。演出家はこれらをつなぎ合わせて一つの作品として発表につなげた。このプロセスでは、特別支援学校の教員や介護職の方々がボランティアスタッフとして多数参加し、参加者を見守りながらサポートした。これにより、障害のある参加者が安心して創作活動に取り組むことができ、彼らの創造性や表現力の向上に寄与した。 また、参加者の一人である場面緘黙の女性が、本事業以外の養成講座での「見本市」にも参加し、劇場に来てスタッフに手紙を渡してくれた。彼女は、自分の活動範囲が少しずつ広がり、江原河畔劇場が安心できる場所となっていると伝えてくれた。

評価項目②: 国際性(任意)

評価の観点
・(国際プレゼンスの向上)海外の劇場やフェスティバル、実演芸術団体等と連携し、国際共同制作や海外作品の招聘等に取り組んでいる。 ・(国際交流)アーティストや文化芸術関係者の招聘等、人的交流や情報交換が行われている。 ・(新たな創客への取組)在住外国人や訪日外国人に向けて文化芸術体験の機会を提供する等、グローバルな視座で創客に取り組んでいる。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
・一般外国人の来館者数	・来館者数増加(総数5名以上)	・来館者数(11名) 劇場見学6名 たじま児童劇団『転校生』観劇2名 たじま児童劇団(小学生の部)発表会2名 豊岡演劇祭2024ディレクターズプログラム 青年団『銀河鉄道の夜』舞台手話通訳付き公演(助成対象外事業)観劇者数1名	江原河畔劇場では、常時劇場見学の受け入れを行っており、2024年度も旅行や帰省の際に立ち寄った海外在住者に対して、劇場の取り組みを紹介する機会が複数あった。タイからのスキーツアーで来日したご家族3名、京都の大学に留学中のアメリカ人学生、ドイツから移住してきた音楽家のご夫婦など、多様な外国人来館者との交流が生まれた。 英語版の劇場パンフレットやリーフレットも新たに作成し、外国人向けの情報提供体制を整備したが、来場者の増加にはつながらなかった。周知手法やアクセス導線に課題があり、今後は観光案内所や宿泊施設との連携、多言語でのオンライン発信など、広報手段の改善が必要であると判断した。 ワークショップファシリテーター養成講座の「見本市」では、海外にルーツを持つ人を対象としたプログラムが企画されたが、該当する参加者は得られなかった。地域在住外国人への情報が届いていないことが明らかとなり、自治体の国際交流窓口や外国人支援団体などと連携し、接点を広げていく必要があると考えている。 今後は、豊岡演劇祭での字幕付き上演、海外フェスティバルや大学との連携、国際共同制作の実施などを通じて、実践の場を広げていく。日常的な外国人来館者との接点とあわせて、国際人材育成という長期的な視点をもった取り組みを複層的に展開しており、地域資源と連携した「国際性の向上」に向けたモデル構築を目指している。	◇今後は日常的な外国人来館者数はもとより、在住外国人を対象にした事業の実施や参加者数等を目標にしても良いのではないかと。 ◇現在、劇場ホームページでの情報発信を進めているが、内容を充実させると共に、英語版等の作成も検討いただきたい。 ◇本助成対象事業ではないが、無隣館インターナショナルの取り組みや豊岡演劇祭等との連携が、劇場の国際化につながっていくことが期待される。	
・外国人アーティストの来館者数	・来館者数増加(総数5名以上)	・来館者数(2名) ドイツからの移住者音楽家のご夫婦2名			

(2) 「国際性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

2024年度、江原河畔劇場では、これまでにない本格的な国際的演劇人育成の枠組みとして「無隣館インターナショナル」を立ち上げた。本事業は、(独)日本芸術文化振興会「文化施設による高付加価値化機能強化支援事業」の採択を受けて実施されたものであり、本助成金の対象事業ではないが、当劇場が掲げる「国際性の向上」において重要な試みであり、将来に向けた基盤整備の一環として位置づけられる取り組みである。 無隣館インターナショナルでは、演出家・劇作家・制作者・舞台技術者などの若手クリエイターを対象に、5年かけて段階的に学びと実践を積む育成事業である。参加者それぞれが将来のビジョンに即した国際展開を設計・実践できるよう構成している。初年度となる2024年度は、主にオンラインによる基礎講義と劇場での合宿研修を通じ、世界の演劇史、アートマネジメント、著作権・税制、演劇教育、劇場論、コンプライアンスといった幅広いテーマを学び、国際的なキャリアの基礎を築いている。 この講座は、単なる海外公演の実施を目標とするものではなく、海外フェスティバルや劇場からの委嘱作品制作、大学・演劇学校での講義機会の獲得、さらには海外劇場のアソシエートディレクターとしての任用といった、持続可能で高度な国際キャリアの実現を目指している。今後は、豊岡演劇祭における字幕付き上演、海外プロデューサーとのマッチング、フェスティバルや大学での視察・研修などを通じ、実践機会をさらに拡充していく予定である。 本事業はまた、兵庫県立芸術文化観光専門職大学、城崎国際アートセンター、豊岡演劇祭実行委員会などと連携し、豊岡市が有する国際的文化インフラを活用して展開している。特に、地域に拠点を置く劇場が、その土地の文化資源と連携してグローバル人材を育成するこのモデルは、地方における文化政策の新たな形を提示するものである。
--

評価項目③: 地域文化拠点機能

評価の観点
・(文化拠点) 地域の特性やニーズを踏まえ、地域の文化資源を活用するなど、地域の文化拠点として事業が組み立てられている。 ・(地域連携) 地域の関係機関と連携・協力し、地域コミュニティの創生や社会課題の解決等に取り組んでいる。 ・(児童生徒への機会提供) 次代を担う子ども達を対象とした鑑賞や体験事業が行われている。 ・ホール利用サービス(貸館事業)の向上 ※ ・自由設定の観点(任意)

※ ホール利用サービス(貸館事業)を行っていない場合は不要

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評定	所見	対応・追加情報など
・市民団体、福祉施設等の参画数、参加者数	・5団体、50人以上	・2団体、12人(ひょっこりシアター)	2024年度は、地域に開かれた劇場運営を目指し、市民団体との連携、子どもへの文化提供、国際性の意識的な導入など、多角的な取り組みを行った。 2023年度から継続して実施しているひょっこりシアターでは、福祉施設から「事業所単位での参加も検討してほしい」との要望があった。そのため、団体での申し込みを受け入れる体制を整えたが、本事業への参加ではなく、訪問ワークショップを希望されたため、市民団体や福祉施設の参画数の目標には及ばなかった。今後も継続的に連携の可能性を探る必要があると考えている。 子ども対象事業では、たじま児童劇団の活動をはじめ、夏休みキッズシアターday2本立て公演(助成対象外事業)、そして「サンタクロース会議」(助成対象外事業)では豊岡市内全小学校の小学2年生が江原河畔劇場を訪れ、観劇を行った。このように劇場に来館しての鑑賞体験を全小学校に届けることができたことは、劇場を拠点とした文化体験の提供という点で意義深い成果であった。子ども対象事業全体の参加者数は942名となり、児童・生徒の心に残る文化体験を創出できたと考えている。	◇アンケート結果から、事業への参画が参加者同士の新たな出会いの場となっていることが確認できた。劇場が地域の交流拠点となり、演劇や表現活動を通して人間の多面性を知る機会が生まれている点は意義深い。	
・子ども対象事業の参加者数	・40人以上	・たじま児童劇団(参加者43名)	新たなコミュニケーションの創出については、アンケートの自由記述や選択項目から、参加者同士の出会いや協働の場が36件確認された。たじま児童劇団では「他校の子と交流できた」などの声が、ひょっこりシアターでは「みんなでやる楽しさを感じた」などの意見が寄せられた。ワークショップファシリテーター養成講座では、選択項目で13名が「出会いの場となった」と回答し、自由記述からも「普段関わらない人と対話できた」「多くの出会いがあった」などのコメントが複数見られた。また、見本市参加者アンケートからも交流に関する言及があり、各プログラムが人と人とのつながりを生み出す場となっていることが示された。	◇下記「エピソードやグッドプラクティス」の記述からも、地域の各種団体等との関係性が深まりつつある点を評価したい。	
・劇場支援会員数	・66人以上(2024年6月現在56人)	・劇場支援会員数(56名)	劇場支援会員数については56名と、目標である66名には届かなかったものの、令和7年度からは、これまでの事業の取り組みや劇場の演目ラインナップなどを紹介したリーフレットを新たに作成し、従来以上に支援会員の獲得に積極的に取り組む方針とした。既存会員や劇場来場者、地域関係団体に向けて配布を行い、劇場の活動全体を広く伝えることで支援の拡大を図る。加えて、貸館利用者からのアンケートでは、全員が「スタッフの対応がとても良かった」と回答しており、利用者との信頼関係も良好に保たれている。	◇劇場支援会員数が横ばいのため、個人会員の獲得の他、各種団体との更なる連携や協力を積み重ねることで、支援の輪を広げていくことが今後の課題と思われる。	
・新たなコミュニケーションの創出状況	・参加者アンケートで新しい人との交流について回答する人が40人以上	・アンケートによる新たなコミュニケーションの創出(36件) たじま児童劇団8件 ひょっこりシアター4件 ワークショップファシリテーター養成講座23件	以上より、2024年度の取り組みは、地域との接点づくり・子どもへの文化提供・交流の創出という観点から、多くの成果を挙げており、文化拠点としての役割を十分に果たすことができたと評価している。今後はさらに地域外との連携や、在住外国人を含む多様な市民への周知を強化し、より開かれた劇場を目指していきたい。	◇意見交換の際に、貸館事業を行うにあたってはウェブサイトでの情報提供を含め、今後制度を整備していくことの必要性について言及したが、さっそく改善されていることが確認できた。	
・貸館利用者の満足度	・70%以上の人が「満足」「ほぼ満足」と回答	・貸館利用者の満足度 全員が「スタッフの対応がとても良かった」と回答しており、利用者支援体制にも信頼が寄せられている。			

(2) 「地域文化拠点機能」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

江原河畔劇場は2020年の開館以来、「地域に根ざした劇場」「人と人がつながる場」としての運営を続けてきた。2024年度はその理念がより一層具体化し、地域の多様な団体との協働が広がった一年となった。特に、劇場を「貸し館」として活用するだけでなく、「一緒に何かをつくりたい」という積極的な協働の申し出が増えてきたことは、劇場の拠点性が深まっていることの証といえる。

たとえば、日高町にある「植村直己冒険館」からは、冒険家・植村直己の没後40年を記念したメモリアル事業の一環として、イベント構成および演出の協力依頼があった。この事業においては、芸術監督・平田オリザが演出家として全体の構成をサポートし、レジデントカンパニーである青年団の俳優が朗読劇に参加するなど、劇場が深く内容に関与する形で連携が実現した。同じ地域に拠点を置く文化施設同士が、役割を補完しあいながら共同で事業を展開する姿は、今後の文化協働のあり方を示す好例である。

また、豊岡市が主催する音楽イベント『おんぶの祭典』では、劇場が「街角コンサート」の会場のひとつとして選ばれた。駅や広場といった公共空間だけでなく、劇場という文化施設も「まちの中に開かれた場所」として位置づけられたことにより、幅広い層の来館者を迎えることができた。親子連れも多く訪れ、普段の椅子席に加え、最前列にはマットを敷くなど、小さな子どもたちもリラックスして音楽を楽しめる環境を整えた。初めて劇場に足を運んだという来場者からは、「こんな場所があるなんて知らなかった」「また来たい」といった声も寄せられ、劇場と地域との新たな接点が生まれるきっかけとなった。

地域の企業・団体との関わりも広がっている。豊岡市商工会が主催した「とくまるゼミナール」では、劇場を会場として講座が開催され、地元の建築会社が講師として登壇した。この建築会社は、かつての商工会館を江原河畔劇場へと改修した施工業者であり、地域住民に対して設計や施工技術の裏側を語る場となった。劇場がただ利用される施設ではなく、その成り立ち自体が語られる対象となり、地域の記憶や関心を喚起する存在になっていることを示している。

但馬4JC(但馬地区青年会議所)から依頼されて実施したワークショップ事業では、江原河畔劇場が会場となり、劇場が提供するコミュニケーションや演劇のワークショップに対する関心の高まりがうかがえた。こうした事例は、劇場建物の認知度向上にとどまらず、地域で展開するアウトリーチ活動や創造的な学びの場としての機能が、徐々に地域内で認識され始めていることを示している。文化・教育・交流の拠点として、劇場の存在感が着実に高まりつつあることを感じさせる。

教育との連携も継続されている。豊岡市が2017年度から教育施策として継続している小学2年生対象の演劇鑑賞事業『サンタクロース会議』についても、2024年度は例年通り江原河畔劇場を会場に実施された。市内すべての小学校から児童が来館し、プロによる演劇作品に触れる機会となったことで、子どもたちにとっての文化的体験の場となったと同時に、教育現場との信頼関係の深さを改めて示す機会となった。

こうした公式な取り組みに加えて、日常的な関係のなかにも劇場の拠点性が広がっていることが感じられるエピソードも生まれている。たとえば、たじま児童劇団に参加していた高校生が進路相談のために劇場職員を訪ねてきたり、ひょっこりシアターに参加した方が仕事帰りにふらっと劇場に立ち寄ってくれたり、自身の勤める福祉事業所のチラシを届けてくれるといった場面があった。こうした関わりの中で、劇場が「活動の場」から「日常的なつながりの場」へと変化している様子が垣間見える。

このように、2024年度は貸館の依頼件数が増えただけでなく、地域の人々や団体が江原河畔劇場を「ともに文化をつくるパートナー」として信頼し、活用してくれる機会が着実に広がった年であった。今後も、公的機関や教育現場、若者世代、企業・団体など、多様な層とのつながりを育みながら、劇場は文化拠点としての機能をさらに強化していきたい。江原河畔劇場は、今まさに地域の一部として息づき始めている。

評価項目⑥:運営体制と持続可能性

評価の観点		現状	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
『実現性』の評価項目より							
(ア)	(多様な財源の確保)予算計画が妥当であり、事業収入のほか、各種助成金や寄附金・協賛金等の獲得に努めている。	劇場支援会員56名	劇場支援会員数10名増加	2024年度劇場支援会員56名	支援会員募集チラシの配布をこれから行う予定であり、今後の広報や対面案内を通じて、入会の促進を図っていく。	「評価項目③地域文化拠点機能」で記載のとおり。	
(イ)	(広報・営業力)広報計画が充実しており、券売や集客、会員制度等の拡充に努めている。	劇場知名度を上げるためにSNS投稿を行っている(現在Instagram登録者数295名)	来年度までに登録者数30%	SNS登録者数 +160件 5.1%増加	登録者数は目標未達ながら増加傾向にあり、継続的な発信の効果が見られた。今後は投稿内容や頻度の工夫でさらなる拡大を目指す。	「評価項目⑤自由設定」で記載のとおり。	
(ウ)	(他館連携)他の劇場・音楽堂等との事業連携や協力・支援を通じて、効果的で効率的な事業運営を行っている。	連携劇場からの来場者数6名	他館からの劇場支援会員来場者数、年間12名に増加	他館からの劇場支援会員来場者数、年間11名	来場者数は目標に近づき、連携の成果が見られた。今後も関係団体と協力し、広域からの来場促進を進めたい。	「他館からの劇場支援会員」の補足説明を追記してください。	アトリエ春風舎(東京都板橋区)、津あけぼの座、テアトルドゥ＝ベルヴィル(三重県津市)、THEATRE E9 KYOTO(京都府京都市)、アートボックス卸町(秋田県秋田市)、アトリエ銘苅ベース(沖縄県那覇市)、アトリエPentA(長崎県長崎市)と包括提携を結び、支援会員制度共有を実施している。
(エ)	(設置者)円滑な事業の継続のため設置者と適切に意思疎通を図っており、設置者による人材や財源の確保等が期待できる。	十分な意思疎通を行なっている			設置者と定期的な対話を行っており、良好な連携関係が保たれている。今後も連携を継続し、支援体制の強化を図る。	当該劇場の設置者は(有)アゴラ企画であり、関係者が重複していることから、より一層ガバナンスの整備が求められる。	
『持続可能性に関するチェックシート』より							
(オ)	(芸術監督)芸術監督等、劇場運営の芸術面を統括する人材が配置されている。	配置されている			芸術監督の存在が創作全体の方向性を支え、安定した芸術運営に貢献している。今後も多様な視点を取り入れながら運営体制を強化していく		
(カ)	(長期的経営)長期的視点に立ち、劇場運営を統括する、経営実務者が配置されている。	配置されている			予算・人材両面で安定した運営ができていますが、今後の事業拡大に向けて、中長期的な戦略と計画が必要である。	経営実務の規定の整備が課題と思われる。	
(キ)	(専門人材の確保)今日的な劇場運営に必要な職能や専門性を踏まえ、運営体制が整備されている。あるいは専門人材の確保や育成に努めている。	努めている			現場に必要な専門性が確保され、創作・運営の質向上に寄与している。今後は若手人材の育成にも力を入れる	要望書に記載の運営体制と組織図が合致していない。また管理費の中に運営責任者の人件費が計上されていないため、可能であれば改善されることが望ましい。	
(ク)	(職制の整理)芸術監督、館長、支配人、プロデューサー、その他管理職の職位及び職能、一般職員の職務内容等が専門性を基に整理され、役割分担されている。	配置されている			組織体制が明確になり、情報共有と意思決定のスピードが向上。今後も柔軟な職制見直しを行っていく	令和6年度まで芸術監督のみで館長・支配人が不在であったが、令和7年度から着任されたとのことであり、運営面・体制面が整備されることを期待する。	
(ケ)	(世代間バランス)年齢バランスを考慮した人材確保を行っている(若年層の雇用に努めている)。	大学生などの若手の人材確保を行なっている			大学生アルバイトやインターンの受け入れに加え、テクニカルスタッフとして若手を雇用し、実践を通じた育成にも取り組んでいる		
(コ)	(ジェンダーバランス)女性管理職比率が30%以上である。あるいは、女性の管理職やリーダー職への登用に努めている。	女性管理職比率は30%以上である			多様性が担保され、公平な職場づくりに貢献している。今後も公平で多様性に富んだ組織運営を心がける。		
(サ)	(ワークライフ・バランス)仕事と育児・介護等の両立支援制度を整備し、推進している。	整備し、推進している			働きやすい環境づくりが進んでおり、スタッフの定着率や満足度も向上。引き続き状況に応じた見直しを行う		
(シ)	(コンプライアンス順守)情報セキュリティをはじめ、各種コンプライアンスの順守規定を策定し、必要な研修を行っている。	規定を策定し研修も行っている。さらに情報セキュリティや各種コンプライアンスに関して、日々のミーティングで職員同士議論を行っている			セキュリティやハラスメントに関する研修を継続し、日々のやりとりの中でもルールの理解と実践が自然に行われるようになってきている		
(ス)	(ハラスメント防止対策)職場内及び創作現場におけるパワー・ハラスメント、セクシュアル・ハラスメント等防止のための指針等を策定・周知し、必要な研修を行っている。	ハラスメントガイドラインを策定し、定期的な勉強会、研修を実施している。また、相談窓口を設置し、複数名でハラスメント案件に対応している。			相談体制や研修を通じて、安心して働ける環境が少しずつ整い、スタッフ間の信頼関係も深まっている。今後も改善を続けていく		
(セ)	(適正な契約事務)アーティストやスタッフと適正な契約書を交わしている。	適正な契約を交わしている			契約の透明性と信頼関係を大切にし、今後は契約書の取り交わしによって業務内容や条件を明確にしてい。内容の見直しや改善も継続していく行う		

4. 総評

・ 団体の自己評価

江原河畔劇場では2024年度、創造・普及啓発・人材育成という3つの柱を軸に、地域に深く根ざしながらも、外にひらかれた多層的な事業を展開した。演劇を通じて表現・対話・協働の場を地域社会に提供し続けることで、子どもから大人まで多様な人々が関わりを持ち、変化し、成長していく「場」としての劇場の機能を強化してきた。

特に人材育成の分野では、「江原河畔劇場ワークショップファシリテーター養成講座」を実施し、学校・福祉・地域活動の現場で求められる実践的なファシリテーターやコーディネーターの育成を行った。この講座は、劇場がこれまでに積み重ねてきた年間200件を超える演劇ワークショップ実施の蓄積を基盤としたものであり、地域社会の多様化やコミュニケーション課題に対応できる人材の育成を意図している。2024年度は、全19回にわたるプログラムが実施され、ワークショップ形式や座学での講義など、多種多様な分野の講座が企画された。ワークショップ設計、ファシリテーション技術、リフレクション、教育現場での需要についてなどワークショップを実施する事に必要な知識から演劇、ダンス、美術など各方面からのワークショップへのアプローチを学ぶ場となった。後半には現場での実習として、劇場が受託している教育・福祉機関でのWSに参画し、観察・補助・実施というステップを踏みながら実践力を高めていった。最終的には、受講生が自ら構成したオリジナルWSを地域の人々に向けて実施する「ワークショップ見本市」も開催され、学びの成果を地域と共有する貴重な機会となった。

普及啓発の分野では、「たじま児童劇団」と「ひょっこりシアター」という二つの演劇ワークショップ事業を実施し、それぞれ異なる対象・目的に対応した取り組みを行った。

「たじま児童劇団」は、小学生の部と中高生の部に分かれて活動し、メンバーは年度ごとに募集しており、年々参加者が増加している。小学生の部では、演劇に親しみ、表現する楽しさを味わってもらうことを主な目的としながら、毎回の活動で作品を創作、発表までを繰り返し行っており、自然と仲間と協力しながらテーマを出し合い、自由な発想で演劇作品を創作・発表するプロセスを重視している。2024年度の発表会では、4つのオムニバス作品を子どもたち自身が主体となって創り上げ、保護者をはじめ多くの地域住民が鑑賞に訪れた。一方、中高生の部では、表現能力や集団創作によるコミュニケーション能力の向上を図ること、また、本格的な演劇作品を作り、誇りを持って世界に発信する経験を通じて、まちづくりなど地域の課題にも関心を持ってもらうことを主な目的としている。中高生の部の本格的な演劇公演は、これまでに、平田オリザによる書き下ろし『十五少年・少女漂流記』、『転校生』を上演。2023年1月に第3期の活動として上演した『転校生』は、翌年9月の「豊岡演劇祭2024」のオープニングプログラムとして招聘された。中高生の部による公演は、中高生の観客割合が圧倒的に高く、本事業を通して中高生世代への普及啓発を促進する。

「ひょっこりシアター」は、障害のある15歳以上の方を対象にした演劇ワークショッププログラムであり、演劇体験を通じた創造とコミュニケーションの場を提供することを目的としている。特別支援学校の教員や福祉関係者と連携し、専門的な支援体制を整えたうえで、単発の体験型WSと、全6回の創作WS＋発表会という2つの形式で開催した。2023年度からスタートした本企画は、前回参加をためらって後悔していた参加者が本年度2024年に改めて勇気を出して参加してくれたりと、継続する事の重要性に気付かされた。特に2024年度に上演された『ひょっこり大作戦』では、初参加者と経験者が混在し、経験者が未経験者をサポートする場面も多くみられた。2023年から引き続き参加している参加者の成長は目を見張るものがあり、1年のうちたった10回に満たないワークショップでも、有観客での発表を体験する事の重要性を感じた。観客からは「ひょっこりシアターは今後も継続して下さい。」「次回も 楽しみにしています がんばって下さい」といった声が多く寄せられ、障害の有無を超えて共に創造する場としての可能性が広がっている。今後は福祉施設との協働や送迎支援の仕組みづくりを通じて、より多様な参加者の受け入れを目指す。

また、江原河畔劇場の強みとして、「無隣館インターナショナル」や「演劇人コンクール」など、他の助成制度を活用した創造的取り組みも進行している。「無隣館インターナショナル」は、国際的に活躍できる演劇人の育成を目的とし、演出家・劇作家・制作者・舞台技術者などの若手クリエイターを対象に、5年かけて段階的に学びと実践を積む育成事業である。2024年度は、演劇理論・国際マネジメント・翻訳・字幕制作などの基礎講義に加え、合宿研修や海外フェスティバル関係者とのマッチングを実施。芸術文化観光専門職大学、城崎国際アートセンター、豊岡演劇祭といった地域資源と連携しながら、滞在型の学びと発信の循環を実現している。将来的には、海外公演の実施や国際共同制作の委嘱を目指し、国際舞台での実践力と創造力を高める体制づくりを進めている。

これら一連の取り組みは、江原河畔劇場が単なる「上演の場」ではなく、地域における文化創造の拠点として、そして人と人とが関係性を築く「学びと共創の場」として機能していることを示している。単発的なイベントではなく、地域の人々とともに時間をかけて積み重ねていくプロセス型の活動を継続することで、信頼関係と表現の基盤を育み、誰もが安心して参加し、発言できる「公共空間」としての劇場を実現している。

今後も江原河畔劇場は、「地域に深く、世界に開かれた劇場」として、地域社会と共に歩みながら、創造・教育・人材育成を通じた文化の循環と持続可能性のある未来を育んでいきたい。

・ 所見

◇劇団青年団を実質的な運営母体とする江原河畔劇場は、こまばアゴラ劇場から人口7万人の兵庫県豊岡市に拠点を移して2020年度にオープンし、コロナ禍を経てようやく事業の形が見えつつある。ワークショップ事業や子ども向け事業ではこれまでの経験を存分に発揮し、2023年からは新たに障害のある人々を対象とした事業にも取り組んでいる点には敬意を表したい。

◇たじま児童劇団の中高生の部による『転校生』公演では、子ども達が同時多発する現代口語演劇を見事に演じ切り、カーテンコールでのきびきびとした動きや晴れやかな表情から、充実感や達成感、プロ意識のようなものが伝わってきた。仲間と共に一時でも演劇に熱中した子ども達は、これからも人間への信頼や希望を失わずに歩んでいけるのではないかと、演劇の本質的価値のみならず社会的価値を再確認した。

◇地域の文化拠点として、コミュニティ・センターとしての役割も意識し、関係各所や地域住民とつながることで存在感を増していくことを期待する。

◇また、こまばアゴラ劇場が演出家を筆頭に多様な人材を輩出した功績から、江原河畔劇場も当助成事業ではないものの国際的な人材養成機関としての役割を期待されている。大学等教育機関を補完する、より実践的なカリキュラムが考案されていると思われ、今後その知見が広く共有されることにも期待したい。

◇一方で、開館して5年が過ぎたところであり、運営体制の整備及び組織ガバナンスの向上や、財務・会計を含めたマネジメント実務の精度の向上は、持続可能性を考える上でも当該劇場の今後の課題と思われる。必要に応じて外部専門家の力を借りるなどして、一般社団法人として規律的な運営がなされていくことを求めたい。たじま児童劇団の創造のプロセス等、優れた取り組みを展開しているので、責任者の把握が十分でない点や要望書の記載が適切でない点、書類面の不備等は改善を図ってほしい。